

**「第3期スポーツ基本計画」では学校スポーツから民間スポーツへの転換**

—東京オリンピック・パラリンピック後の「スポーツ基本計画」を考える—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：文部科学省では、令和3年4月21日のスポーツの審議会総会において室伏広治スポーツ庁長官から「第3期スポーツ基本計画」の策定について諮問。今後、令和3年度中に、「第3期スポーツ基本計画」を策定予定。なぜ林さんはこのテーマについて関心があるのですか。

A：(1)小学生・中学生のころから体を動かすことが好きで、特に中学校では部活動で柔道を習い、大変勉強になったからです。

(2)開倫塾を創設してからしばらくして、当時の栃木県佐野市長の岡部様から「ドッジボールを通して青少年の健全育成をしたいので協力してほしい」との御依頼がありましたので、開倫杯ドッジボール大会を年1回4月に開催。今日では、開倫塾のオフィシャルスポーツとして毎年1回、開倫ユネスコ杯ドッジボール大会を、栃木県・群馬県・茨城県・福島県の各ドッジボール協会様とともに開催、各県入賞チーム同士のファイナル大会も含め年5回の公式大会を開催しています。

(3)2022年度からは、パラリンピックの正式種目である「ボッチャ」を開倫塾のオフィシャルスポーツに加え、何らかの形で「ボッチャ」を通してのスポーツ振興・青少年を含め全年代の皆様と障害をもつ皆様との支援促進を考えております。

(4)このような折、会員として所属する公益社団法人経済同友会(東京)の委員会の1つである「スポーツとアートの産業化委員会」で12月3日に日本工業倶楽部会議室で、「第3期スポーツ基本計画」の概要について、スポーツ庁の政策課長の今井裕一様からお話をお聞きしました。大切なことなので、より勉強を深めて自分なりの意見をまとめ、皆様と御一緒に考えたく思いました。

Q：林さんが「第3期スポーツ基本計画」として取り入れたほうがよいと考えることは何ですか。

A：第1は、小学校・中学校・高校の部活動の担い手を、学校の先生から地域にいる民間の専門家に転換することです。

(1)日本の学校では、教科外の教育活動として多くの「スポーツ」や「文化・芸術」活動が部活動として奨励されています。この結果、多くの小学生・中学生・高校生がスポーツや文化・芸術活動にアクセス・参加できる「機会(チャンス)」を得ています。

(2)慶應義塾の塾長であられた小泉信三先生が、「スポーツの3つの宝」として「練習は不可能を可能にする」「フェアプレイ」「よき友」を掲げられました。日本の子どもたちが体力・気力・ねばり強さ・誠実さ・まじめさはもちろん、スポーツマンシップ・高い芸術性・礼儀正し

さ・チームプレイの精神など人間としての徳や他人を思いやるやさしさ(愛情)なども身に付けているのは、学校での教科外教育、とりわけ部活動による教育効果であることは、多くの人々の認めるところです。

- (3)日本のかくれたカリキュラム(ヒドゥン・カリキュラム)として、学校行事や学級会活動、生徒会活動、当番活動などとともに、部活動が海外の教育関係者から高く評価されているのも十分理由があります。
- (4)何よりも、部活動を行うについての経費負担(施設利用費・人件費を含め)がほとんど無料であることは、子どもたちのスポーツや文化・芸術活動に参加するチャンスを大きく広げるものとして高く評価されます。
- (5)このような素晴らしい内容の部活動が第2次世界大戦終了直後から70年間にわたって行われたことは、日本の教育文化の質を著しく高めるものとして、世界に誇れるものです。
- (6)但し、このような高い質的内容に至るまでには、部活動を御担当する先生方の文字通り「献身的な御尽力」があったことも万人が認めるところです。
- (7)そこで、「第3期スポーツ基本計画」では、今までの部活動の伝統をできるだけ尊重しながら、「担い手」の部分だけ大幅な見直しをすべきかと考えます。

**Q：具体的にはどのようなことですか。**

- A：(1)部活動を本格的に行っている先生の教科指導の時間をできるだけ削減し、部活動の指導時間を先生の勤務時間に含めることです。
- (2)地域にお住まいの方、御勤務の方の中で部活動として行われているスポーツや文化・芸術活動の指導者にふさわしい方を民間人材の一環としてボランティアティーチャーとしてお招きし、大いに御活躍願うことです。
- (3)スポーツジムや各種文化・芸術団体などの民間事業者に業務委託する場合には、大きな経費負担が生じます。その場合には、子どもたちの保護者の負担が増えないよう、公的な助成を怠らないことが大事です。もしくは、同窓会や地域の企業などから寄付金をつのり、税金をできるだけ用いない工夫も必要です。
- (4)部活動を担当する「学校の先生」や「ボランティアインストラクター」、「業務委託をうける指導担当者」の皆様の「指導力向上」のための「スキルアップ研修会」のソフト開発をスポーツ庁が先頭切って進め、オンラインとリアルを最大活用、効率よく行うべきと考えます。
- (5)スポーツ庁内に「部活動指導者スキルアップセンター」の開設を提言します。

**Q：「第3期スポーツ基本計画」として、2番目にもりこむべきことは何ですか。**

- A：(1)「スポーツ振興における企業の役割」を徹底的に議論し、基本計画の中に入れることです。
- (2)開倫塾では、「ドッジボール」と「ポッチャ」をオフィシャルスポーツといたく考えておりますが、企業規模に関係なくあらゆる企業がオフィシャルスポーツを定め、できる範囲でそのスポーツの振興につとめることを提言したく存じます。支店や事業所ごとにオフィシャルスポーツを定め、各地の実情に合致したスポーツを社員の皆様がオフィシャルスポーツとして自由にお決めになり、「地域に根差した企業としての役割」を果たすことを、スポーツ

庁と各自治体とが連携して奨励して頂きたいと存じます。

(3)可能であれば「文化庁」などとも連携し、各企業に「オフィシャル文化芸術活動」を奨励することを提言します。開倫塾では、若手プロクラシック音楽演奏家支援とクラシック音楽の普及を目指す一般財団法人「100万人のクラシックライブ」の御協力を得て、「1万人のクラシックライブコンサート」を4年前から97回実施。2022年度中に100回を目指しています。

(4)事業規模に限らず、日本国内のすべての企業・すべての事業所が1つ以上の「オフィシャルスポーツ」「オフィシャル文化・芸術活動」に、地域の皆様、ビジネスパートナーの皆様、社員の皆様とともに取り組み、1つ1つのスポーツ、文化・芸術活動の「価値」を十分認識した上で、自分なりの意味を見出し、意味付けを行うことを促すことが国民の生活の質の向上、生きがいの向上に直結すると確信します。地域のスポーツや文化・芸術活動の振興は地域創生にも直結します。

**Q：学習塾・予備校・私立学校・教育関係の事業に携わる経営者の皆様にお伝えしたいことはありますか。**

A：(1)大切なのは、競技会や大会で相手を打ち負かし、勝負に勝ち、よい成績を取ることありますが、子どもたちが取り組んでいるスポーツや文化・芸術活動の「価値(大切さ)」を少しずつでも教え、認識させ、一人ひとりの子どもたちにとっての意味を自分の力で考えさせること、そして「自分なりの意味付け」を促すことです。大切な人生の瞬間をそのスポーツや文化・芸術活動とどのように一緒に過ごすのかを考えることを促すことです。

(2)時々でよいですから、そのスポーツや文化・芸術の発祥の歴史や大切な価値観などをわかりやすく説明してあげることです。私は、中学校時代に柔道の監督をしてくださった椎名弘先生(当時柔道5段)から、講道館の加納治五郎先生の教え「自他共栄」を絶えず教えられました。また、真夏の暑中稽古合宿や厳しい早朝の寒中稽古の中、「練習で泣いて試合で笑え」ということばをたびたび聞き、今でも有難く思っています。

(3)学校などで一度習ったスポーツや文化・芸術活動は「生涯にわたって継続すること」の大切さを、学校時代に教えて頂きたいということです。貝原益軒は「楽訓」という著作の中で、人生における「楽しみ」は「学ぶ」ことによって得られると述べておられます。学校時代に習ったスポーツや文化・芸術活動は、その学校時代だけで終わらせるにはあまりにも「もったいない」ものです。そのスポーツや文化・芸術活動の「価値」「意味」を学校時代に少しずつでも御指導頂き、一人ひとりの生涯の「楽しみ」とする基礎を与えて頂きたいと願います。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：今月も、皆様がお読みになれば必ずためになる本を御紹介いたします。

(1)1冊目は、ローマン・クルツナリック著「グッド・アンセスター、わたしたちは『よき祖先』になれるか」あすなろ書房 2021年9月30日刊です。内村鑑三の名著「後世への最大遺物・デンマルク国の話」「代表的日本人」(岩波文庫)の現代版、日本についての記述もあり、親しみやすい好著です。

(2)2冊目は、伊集院静作「ミチクサ先生(上)(下)」講談社 2021年11月15日刊です。日本経済新聞朝刊に2019年9月11日～2020年2月20日まで連載、病気のため9か月の休載の後2020年11月11日～2021年7月22日まで連載の夏目漱石の一代記。漱石ファンの一人なので、連載中は日経新聞電子版を見るのが毎日の楽しみで、物語に沿って夏目漱石のみならず、友人の正岡子規、高浜虚子、教え子の寺田寅彦、果ては芥川龍之介などの作品を毎日のように読み返していました。伊集院静氏が病後も書き続けた渾身の素晴らしい作品です。是非、御一読ください。

(3)3冊目は、和辻哲郎著「鎖国(上)(下)－日本の悲劇」岩波文庫、岩波書店1982年2月16日刊です。世界史とりわけルネサンスや大航海時代の観点から日本の鎖国を考えた血湧き肉躍るほど元気の出る作品です。終戦直前・直後4～5年間の東京大学の授業や研究成果を取りまとめたもので、読み応えがあります。「風土」「古寺巡礼」「人間の学としての倫理」「日本倫理思想史」などの代表的作品とともに是非、御一読ください。このようなパンデミック禍で閉塞感にあふれる時期は、作品が構想され書かれた終戦直前・直後と近似していますので元気が出ます。

(4)4冊目は、齋藤孝著「偉人たちのブレイクスルー勉強術、ドラッカーから村上春樹まで」文春文庫2012年7月10日刊です。「自分独自の勉強方法をつかめば人生はひらける」「この人を見よ、『オリジナル勉強術』を確立した偉人たち」など納得する内容が目白押しです。齋藤孝先生の御著書はすべて池上彰先生同様、学習塾・予備校・私立学校の先生方に役立ちます。

\* 2021年中は、本当にお世話になりありがとうございました。2022年もどうかよろしく願い申し上げます。

2021年12月5日記